

田中優子

● 朝鮮人参（花瓶）

この演目には、病気の母親に高価な薬を飲ませたい道具屋が出てくる。高価な薬といえば、江戸時代では万能薬と考えられていた朝鮮人参であった。なぜ高価なのか。朝鮮や中国東北部だけに自生する植物だからである。人工栽培はおこなわれていなかったのだ。しかし需要は高い。江戸では本草家で幕府の医官だった田村元雄が、幕府から種子を下付されて栽培を試みた。元雄が栽培に尽力しているころ、カナダ産の朝鮮人参が宣教師によって発見されてフランスに持ち込まれ、フランスから広東に入り、日本にもやってきた。これを「広東人参」という。今でも薬品が世界競争によって製造されているように、江戸時代も朝鮮人参をめぐる競争があったのである。結果として、田村元雄は世界で初めて人工栽培に成功し、そのころには、ほとんどの薬草が国産化を達成していた。

● 曲馬団（馬大家）

日本人が最初に見た曲馬は、江戸時代初期に来日した朝鮮曲馬団の曲馬であろう。ただしこれは江戸城内で開催されたただけだった。その後、日本でも歌舞伎の馬芝居や曲乗りの見世物はおこなわれたが、盛んだったとは言えない。明治時代になると欧米諸国からサーカス団が渡来した。早くも一八六四年には横浜で興行している。サーカスは曲馬あり、空中ブランコや軽業あり、動物の演芸など演目は多彩だった。一八八六年にイタリアのチャリネ曲馬団が来日すると歌舞伎もそれを取り入れ、日本に多くの曲馬団やサーカスが生まれた。この演目はその時代以後の咄だろう。ちなみにサーカスは古代ローマの競技場などを巡回してヨーロッパに広まったという。見世物は主に人間や動物の曲芸だが、現代では自動車レースのF1（エフワン）も世界を巡回するのでF1サーカスと呼ばれている。

●おせつ徳三郎（刀屋）

この演目は初代の春風亭柳枝（一八一三～一八六八）作の、人情咄に分類される「おせつ徳三郎」の一部である。刀屋は「おせつ徳三郎」を上・下に分けた場合の下にあたり、上は初代の三遊亭円遊（後の初代金原亭馬生）（一八五〇～一九〇七）がこの部分だけを一席物に仕立てたと言われる「花見小僧」である。どちらも根底に流れているテーマは、現代では当たり前になってしまった自由恋愛だ。しかし江戸時代の結婚は個人と個人ではなく、代々存続させなければならない武家や商家が、その持続可能性のために相手を選ぶ。その熟慮をしない恋愛結婚は「浮気な結婚」と呼ばれた。この咄のように大店の一人娘であれば、店を継ぐ婿を選ぶ必要があった。二人の師匠の生きた幕末から明治にかけては武家がなくなり離婚が多くなり、ようやく恋愛結婚も現実的になりつつあったのだ。

●格言（天災）

八五郎は心学の先生のところへ行かされるが、先生が語る話は実際の心学とは異なる。石門心学は「天地」や「道」などの理屈から「義」や「孝」までを語る儒学的一种だからである。さらに心学講義では極めて具体的に、朝起きたら神棚と仏壇を拝めとか、祖父母と両親には手をついて挨拶しろ、嘘をつくな、身障者を笑うな、下の者をたたくななど、日々の行動指針も語る。それとは異なり、ここで先生が語るのは世間でよく言われる格言である。格言は目の前に展開する困難をとりあえず治めるために、現実的な処世に役立つよう、人生の真理や機微を簡潔に述べた伝承だ。この咄には複数の格言が語られるが、諭された人が「成程そのとおりだ」と身につまされない限り格言にはならない。あとで他の仲間に教わったことを話そうとするが話せない。どうやら身につまされていないようだ。

● 講と無尽（朝這い）

咄の冒頭に出てくる無尽とは、無尽講の略である。講は元々、寺院などの維持や宗派の拡大を意図して、寺院側が組織した宗教的講が始まりである。それに対し一般の人々が集まって講を結成し、少額の米穀や銭貨（掛金）を出し合い、そこで集計したものを抽選その他の方法で講中の者に融通した経済的講が無尽講である。地方によって頼母子（たのもし）、憑支（ちょうし）とも言われた無尽講は、日本に古くからあった相互扶助的な金融方式である。この咄に「無尽に当たった」とあるのは、その抽選に当たったという意味だ。どちらも鎌倉時代以降に出現したと考えられている。無尽は、庶民の家普請、葬儀、結婚、病気、災害時の自衛対策として有効だった。しかし運營業務の煩雑さや資本主義の発達で、一社の物品無尽会社以外すべて相互銀行へと移行した。

田中優子（法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授）

法政大学社会学部教授、学部長、法政大学総長を経て現職。

専門は江戸時代の文学、美術、生活文化、アジア比較文化。

現代社会についての連載エッセイなどもある。

『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞

『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞

その他著書多数。2005年紫綬褒章。